

第2回研究会

変貌する琵琶湖—沿岸域研究の経験から—

滋賀県立大学名誉教授・里山学研究センター研究員

秋山 道雄

報告者は、1980年代半ばから琵琶湖沿岸域の研究に関わってきた。今回の研究会では、報告者が関わってきた沿岸域研究の内容と琵琶湖をめぐる問題の変遷、および現在琵琶湖が直面している問題を中心に報告した。

琵琶湖をめぐる問題を琵琶湖・淀川水系のなかで捉えるという認識は、琵琶湖総合開発（1972～1996年度）によって普及した。1972年に琵琶湖総合開発特別措置法が成立するわずか前の1969年・1970年に、淀川流域の水道でカビ臭問題が発生した。これは、琵琶湖の富栄養化が臨界点を越えたものとみることができるが、これ以後、広範な市民各層に琵琶湖の汚濁問題が認識されていくことになる。1979年に滋賀県が富栄養化防止条例を制定するころには、琵琶湖の富栄養化はピークを迎えつつあった。

こうした経緯があるため、琵琶湖の環境問題というと水質汚濁問題に焦点があたりやすいが、現在では諸種の取り組みの結果、富栄養化を中心とする水質汚濁問題は峠を越え、生物多様性保全をめぐる問題が前面に登場している。こうした琵琶湖の変化が顕著にみられるのが沿岸域である。沿岸域は、水域と陸域の境界領域にあるため、生態学でいうエコトーンにあたる。この沿岸エコトーンの特性とそこに展開する問題を把握するために有効性を発揮するのが、景観生態学的な視点と方法であった。

過去30年余の琵琶湖沿岸域研究を振り返ると、大体10年ごとに研究がまとめられているので、今回の報告ではほぼ10年を単位として研究の特徴を整理し、紹介した。

1980年代の研究では、景観生態学をめぐる方法論的検討と沿岸域の学際的調査を実施した。その成果としては、地形・地質・土地利用を中心とした土地条件、湖岸植生、水生生物、微生物、鳥類など個別分野の資料収集と沿岸域全体における各要素の賦存状況を把握した。さらに、これら要素のマップオーバーレイによって、沿岸域の景観生態学的区分（滋賀県琵琶湖研究所、1991）を行った。

1990年代の研究では、沿岸域管理という視点の導入と景観生態学的な分析の適用が進んだ。1980年代に収集した個別分野の資料の整理・解説の上に立って、景観生態学図を作成した。北湖と南湖の東岸域のうち、沿岸域の変化が著しい場所をとりあげて現地調査を実施し、景観生態学図を用いた地域環境の診断（環境政策研究会、2002）を試みた。

21世紀に入ってからの研究では、生物多様性保全をベースにおいて、沿岸域管理の基礎概念と枠組みの検討を行った。またこれと並行して、約20年前に収集した資料と比較しつつ沿岸域の現況調査を進めた。滋賀県琵琶湖環境科学研究センターによる2007年度～2010年度にかけて

の「湖岸生態系の保全・修復および管理に関する研究」の成果が、『琵琶湖岸の環境変遷カルテ』（2011）としてまとまった。

沿岸域研究では、イギリスやオランダの研究者が地球温暖化問題に関する研究の一環として取り組んだ「沿岸のレジリエンス」という概念の琵琶湖研究への適用可能性についても検討を進めてきた。景観生態学からみたエコトーン的重要性が明らかになった今日、沿岸エコトーンや沿岸のレジリエンスをめぐる知見の琵琶湖への政策的含意を考察するという課題が登場している。